

## メッセージアウトライン

### マタイ 27：27～66 「イエスの苦難と葬り」

<27：1～26 の要約>

イエスはゲツセマネの園で捕らえられ、ユダヤ教の最高議会で死刑を宣告された。これは片寄った一方的な裁判によるものであった。(26:57～66) 続いてイエスはローマ総督ピラトのもとに連れ出され、そこで正式な裁判を受けることとなった。実際に人を死刑にする権限を持っているのはユダヤ人の議会ではなく、ユダヤを支配しているローマ帝国の総督なのである。ピラトは公平な裁判を行おうとしたが、ユダヤ人たちはイエスの死を望んで、暴動になりそうになったので、ついにイエスを十字架につけるために引き渡した。代わりに恩赦として、祭りのたびごとに一人の囚人を釈放することになっていたので、暴動と人殺しのかどで牢に入れられていたバラバという名の知れた囚人を釈放した。本当はピラトはイエスを釈放したかったのであるが、群衆の圧力の前に裁きを曲げてしまったのである。

[27:27-44] 「それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊を集めた。そしてイエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、『ユダヤ人の王様、万歳』と言って、からかった。またイエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたいた。こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。兵士たちが出て行くと、シモンという名のクレネ人に出会った。彼らはこの人に、イエスの十字架を無理やり背負わせた。ゴルゴタと呼ばれている場所、すなわち『どくろの場所』に来ると、彼らはイエスに、苦みを混ぜたぶどう酒を飲ませようとした。イエスはそれをなめただけで、飲もうとはされなかった。彼らはイエスを十字架につけてから、くじを引いてその衣を分けた。それから腰を下ろし、そこでイエスを見張っていた。彼らは、『これはユダヤ人の王イエスである』と書かれた罪状書きをイエスの頭の上に掲げた。そのとき、イエスと一緒に二人の強盗が、一人は右に、一人は左に、十字架につけられていた。通りすがりの人たちは、頭を振りながらイエスをののしった。『神殿を壊して三日で建てる人よ、もしおまえが神の子なら自分を救って見ろ。そして十字架から降りて来い。』同じように祭司長たちも、律法学者たち、長老たちと一緒にイエスを嘲って言った。『他人は救ったが、自分は救えない。彼はイスラエルの王だ。今、十字架から降りてもらおう。そうすれば信じよう。彼は神に抛り頼んでいる。

神のお気に入りなら、今、救い出してもらえ。【わたしは神の子だ】と言っているのだから。』イエスと一緒に十字架につけられた強盗たちも、同じようにイエスをののしった」

緋色のマントは王としての紫のマント、茨の冠は黄金と宝石でできた王冠、葦の棒は王の持つ笏を模したもので、そのようにしてユダヤ人の王の姿を滑稽にあらわし、ローマ兵はそのような姿のイエスに礼拝の真似をしてからかい、侮辱した後、ゴルゴタすなわち「どくろの場所」という刑場に連れて行った。その途中で、夜通しのユダヤ人側による宗教裁判とローマ総督ピラトによる裁判とむち打ち、侮辱、からかい等の手荒な仕打ちによって一睡もせず心身ともに疲労の極みにあったイエスの代わりに北アフリカのクレネ出身のシモンという男を徴用し、無理やり十字架を背負わせた。当時ユダヤ人は世界の各地に住んでおり、シモンもそのような一人であったのであろう。

「苦みを混ぜたぶどう酒」とは十字架につけられる者の痛みを麻痺させる飲み物でイエスがこれを拒否されたのは十字架の死という苦杯を最後の一滴まで飲み干そうとされたからである。そのようにしてイエスは十字架につけられた。着ていた衣ははぎ取られ、腰布だけとなり、ローマ兵がくじを引いてその衣を分け合った。これは詩篇 22 : 18 の成就である。イエスの頭の上には「これはユダヤ人の王イエスである」と書かれた罪状書きが掲げられた。並行箇所ヨハネ 19 : 20 では「それはヘブル語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた」とあり、ピラトはすべての人に読めるようにしたのであろう。しかしこのことは、十字架にかけられたイエスの王権が全世界に及ぶことを奇しくも示すこととなった。このとき、二人の強盗も共に十字架につけられた。イエスが真ん中で右と左が強盗である。罪なきイエスが罪ある者のうちに数えられたのである。これはイザヤ 53 : 12 の成就である。イエスが真ん中につけられたのは、最悪の犯罪人とみなされたからであろう。その強盗たちも、道を行く人々も、祭司長たちも、律法学者、長老たちも皆イエスをあざけた。彼らの言ったことは皆同じ内容で、「もしおまえが神の子なら自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い」であった。神の子ならば十字架から降りて来れるはずだ、その力があるはずだ、というのである。しかし、イエスがそうされないのはそのように愚かな私たち人間の救いのためであり、悪魔の働きを打ち破るためであった。もしイエスが十字架から降りていたら私たちに救いはなかっただろう。

[45-50]「さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ。』これは、『わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか』という意味である。そこに立っていた人たちの何人かが、これを聞いて言った。『この人はエリヤを呼んでいる。』そのうちの一人がすぐに駆け寄り、海綿を取ってそれに酸いぶどう酒を含ませ、葦の棒に付けてイエスに飲ませようとした。ほかの者たちは『待て。エリヤが救いに来るか見てみよう』と言った。しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された」

「闇が全地をおおった」とは、イエスが全人類の身代わりとなって経験された神からの断絶の恐怖と霊的暗黒を象徴するような現象である。

イエスは大声で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは説明されているようにヘブル語で「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになっ

たのですか」という意味である。ここで神は実際にイエスの父また味方という立場から罪人に怒りとのろいを注ぐさばき主の立場に移っておられるのである。ここにイエスの苦悩の叫びがあった。しかしそれは私たちの罪を身に負われたゆえの叫びであり、本来ならば私たちが神の怒りとのろいを受けて滅びに行かなければならないのである。これを見ていたある者たちは旧約時代の預言者で竜巻に乗って天に上って行ったエリヤ(Ⅱ列王 2:11)を呼んでいると誤解して、はたしてエリヤが来るかどうか見てみようと言った。しかし、イエスはもう一度大声で叫んで息を引き取られた。ルカ 23:46 によれば、「父よ。わたしの霊をあなたの御手にゆだねます」であった。イエスはただ単に十字架刑によって死なれたのではなく、神の救いの計画の成就として自らその霊を父なる神にゆだねられたのである。(ヨハネ 10:18 参照)

[51-54]「すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いて、眠りにっていた多くの聖なる人々のからだが生き返った。彼らはイエスの復活の後で、墓から出て来て聖なる都に入り、多くの人に現れた。百人隊長や一緒にイエスを見張っていた者たちは、地震やいろいろな出来事を見て、非常に恐れて言った。『この方は本当に神の子であった。』」

エリヤの出現を期待した者たちとは違って、ローマ軍の百人隊長と彼と一緒に見張りをしていた者たちは「この方は本当に神の子であった」と言った。彼らがそう考えた理由は、

① 神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた(51)

神殿の幕とは神殿の聖所と至聖所を隔てる垂れ幕のこと。聖所は祭司たちが入って神との交わりと祈りのため、パンを備え、香をたく所。その奥の至聖所は年に一回、大祭司が全国民の罪の贖いのために入るこゝしか許されない場所である。神は昔、この至聖所においてイスラエルに語られた。それゆえ、この垂れ幕はイスラエルが聖なる神のところまでは近づけないこと、大祭司による罪の贖いが必要なことを象徴的に示すものであった。しかし、今、イエスが十字架上で私たち罪ある人間の身代わりとなって死なれたことにより、この幕が裂けてしまった。つまり、神と人とをさえぎる隔てがなくなったのである。これはもう旧約時代の動物のいけにえを献げるといった一時的な儀式ではなく、本物の神の御子イエス・キリストの贖いの死によって、はばかりなく神に近づけるようになったことを象徴的に示している。

② 地が揺れ動き、岩が裂けた(51)

これは「闇」(45)と同じく神の怒りを示すものである。

③ 墓が開いて、眠っていた多くの聖なる人々のからだが生き返り、イエスの復活の後に墓から出て来て、エルサレムの町に入り、多くの人に現われた(52, 53)

死を象徴する墓が開き、聖なる人々のからだが生き返ったということは、イエスの贖いが成功し、彼を信じる者に復活の希望が与えられたことを意味する。

この聖なる人々とは旧約時代の信仰者のことか、イエスの時代に死んだ信仰者のことか何もわからない。また彼らが墓から出て来てエルサレムの町に入

り、それからどうしたのかもわからない。しかし、分かることもある。それは、第一にイエスの死が墓を開いたということ、第二はイエスの復活が多く眠れる信仰者たちの新しいいのちを示したということである。死を象徴する墓石がくつがえされ、信仰者たちが生き返ったということは、イエスの贖いが成功し、彼を信じる者の死は永遠のいのちの世界への入口に変わったということの意味する。私たちはこの地上の人生を死で終わっても、またイエスとともに死からよみがえることができるのである。

イエス・キリストの死は、動物を罪のいけにえとしてささげるといふ旧約の儀式を廃止し、この世と天の御国との間に立ちはだかっていた死の門をくつがえしたのである。

私たちもこの百人隊長たちと同じように「この方は本当に神の子であった」と告白し続け、この世に対して証ししていくことが大切である。

[55-56]「また、そこには大勢の女たちがいて、遠くから見ていた。ガリラヤからイエスについて来て仕えていた人たちである。その中にはマグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子たちの母がいた」

イエスの弟子たちには多くの女性たちもいた。ここでは特に三名の女性たちがあげられている。

「マグダラのマリア」はルカ 8：2 によればイエスに七つの悪霊を追い出してもらった女と言われている。それゆえイエスに対する感謝の思いも大きなものであったであろう。「ヤコブとヨセフの母マリア」このヤコブはイエスの十二弟子の一人ヤコブのことと思われる。→マタイ 10：3

「ゼベダイの子たちの母」ゼベダイの子たちとはイエスの十二弟子のヤコブとヨハネのことである。→マタイ 4：21 彼女の名はサロメ→マルコ 15：40

[57-61]「夕方になり、アリマタヤ出身で金持ちの、ヨセフという名の人が来た。彼自身もイエスの弟子となっていた。この人がピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願い出た。そこでピラトは渡すように命じた。ヨセフはからだを受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩を掘って造った自分の新しい墓に納めた。そして墓の入口に大きな石を転がしておいて、立ち去った。マグダラのマリアともう一人のマリアはそこにおいて、墓の方を向いて座っていた」

十字架刑による死の後、イエスは、ひそかにイエスの弟子となっていたアリマタヤの金持ちでヨセフという人によって葬られることになった。「アリマタヤ」はサマリアとエルサレムの間地点の西側にあった町。この時、ヨハネ 3 章で夜、イエスのところにやって来て、その後イエスを信じたと思われるニコデモもイエスのからだに塗るためのたくさんの香料をもってやって来た。彼らは二人ともユダヤ人議会のメンバーであったがイエスの死刑には賛成していなかった。→ルカ 23：50~ 51, ヨハネ 3：1

そのようにしてイエスのからだはきれいな亜麻布に包まれ、岩を掘って造ってあったアリマタヤのヨセフのための墓に納められた。その入り口には大きな石が転がされてふたをされた。

マグダラのマリアともう一人のマリアは墓の方を向いて座り、一部始終を見てい

た。そのような彼女たちが安息日明けに香料を塗るために再び来るときに場所を間違えるはずはない。

[62-66]「明くる日、すなわち、備え日の翌日、祭司長たちとパリサイ人たちはピラトのところに集まって、こう言った。『閣下。人を惑わすあの男がまだ生きていたとき、【わたしは三日後によみがえる】と言っていたのを、私たちは思い出しました。ですから、三日目まで墓の番をするように命じてください。そうでないと弟子たちが来て、彼を盗み出し、【死人の中からよみがえった】と民に言うかもしれません。そうすると、この惑わしのほうが、前の惑わしよりもひどいものになります。』ピラトは彼らに言った。『番兵を出してやろう。行って、できるだけしっかりと番をするがよい。』そこで彼らは行って番兵たちとともに石に封印をし、墓の番をした」

イエスが十字架につけられたのは金曜日であり、明くる日は土曜日で安息日である。安息日には労働も出歩くことも禁じられていたのに、祭司長、パリサイ人たちはそれを破ってまでイエスのからだの盗難対策を総督ピラトに願う。それで、総督ピラトの命によってローマ兵が三日目まで墓の番をし、墓をふたした石に封印までした。人間的に見ればこれですべては終わってしまったかのように見える。しかしそれで終わりではなく、それは大いなる始まりであったのである。

そして日曜日の朝を迎えることになる。

今日はイエス・キリストの十字架の苦しみと死は私たちのためであったということを中心に刻んでおきたい。私たちの罪の贖いのために身代わりとなって十字架にかかって死なれた主に心から感謝しよう。